

ブータンミュージアム通信

vol.23

目次

1. ブータンは私の「推し活」 永井 弘明・・・1
2. クロス・オーバー（越境）のススメ 脇本 幹雄・・・4
3. ブータンにおける JICA 海外協力隊の活動 新保比奈子・・・10
4. 不思議な出会い 栗原哲朗 ソナム・チョキ・・・13
5. Gyalsung – Bhutan’s National Service Ugyen Dorji・・・21
6. My story and my aspirations Yangchen Lhamo・・・28
7. 最近のクエンセルの記事を読んで その VII
第4次国民議会選挙について 奥村 彰二・・・33



ブータンミュージアム通信 Vol. 23

認定 NPO 法人 幸福の国

〒911-0448 福井県勝山市保田 85-18

発行日 2024 年 1 月 20 日

ブータンは私の「推し活」

永井 弘明¹⁾

私たち夫婦とブータンとの関りは、昨年の9月からブータンの留学生ダムチョーさん（福井大学教職大学院に1年半留学）に、私の建築設計事務所の1階に住んでいただくところから始まったので、現在1年余りが経過したことになる。その時はこれほど私たち夫婦がブータンに入れ込むことになるとは想像もしなかったのだが。その後、ダムチョーさんからの誘いもあり、ゲストビザが下り、4月末から10日間ブータンを訪れることになった。



勝山市にあるブータンミュージアムにて 左から妻・私・ダムチョーさん

単なる観光旅行にしたくなかったので、私の友人でブータンに詳しい人を探したのだが、予想外に多かった。高校の同級生、梅田さんがブータンの5か年計画に関わっており、現在JICAブータン事務所に勤務する須藤さんを紹介された。また、私の所属する建築士会で講演をお願いしたことのある向井順子さん（ブータンの伝統建築物の保存・修復の関係

1) 福井まちづくりNPO理事長、認定NPO幸福の国 正会員

で長らくブータン政府に勤務されていた)からもアドバイス頂いた。現地ではJICA派遣の看護師の新保さん、旅行社の青木薫さん、颯ラーメンの櫻井さん、ダムチョーさんご家族以外に、福井を案内したテンジンさん親子にもお世話になった。そのことが特別な旅にしてくれたようだ。

ブータンから帰り、様々な会でブータンの旅を報告する機会を得た。そしてブータンのことを福井のまちづくりの仲間にも知って貰いたく、ブータンミュージアムを運営する認定NPO幸福の国の皆さんに賛同を頂き、ブータンからJICAの須藤さんにもオンラインでご参加頂けることになり、9月2日に福井ブータンシンポジウムを開催できた。予想外だったのは、在東京ブータン王国名誉総領事館、ブータン研究所からも告知の記事を出していただけた。お陰様で、日本各地のブータンに関心のある皆様にもご参加いただけた。これも月原先生(認定NPO幸福の国理事長、福井大学教授)、須藤様のお陰だと深く感謝している。

先日ロータリークラブで発表した際に、私の活動を「推し活」だと言われた。最初は違和感もあったが、私の活動は月原先生のようにアカデミックなものでも須藤様のようにオフィシャルなものでもなく、好きなブータンを応援する活動・推し活に他ならないと思った。しかしそれによって好奇心を刺激され、モチベーションも高まっているのだから、ブータンとの出会いは私たち夫婦の残りの人生を変えるものになったのかも知れない。

公示されたシンポジウムの案内ビラ

2023.09.02.13:30-16:00



福井ブータンシンポジウム2023

ブータンを知り ブータンから学ぶこと



■令和5年9月2日(土) 13:30～16:00 オンライン(zoom)

■スケジュール

参加費無料

＜セッション1:ブータンの概要＞

NPO法人幸福の国(ブータンミュージアム)理事長 月原 敏博

＜セッション2:ブータンの今＞

①今春、ブータンを訪ねて ～ブータンとの交流から学んだこと～

福井まちなかNPO理事長 永井 弘明

②日本とブータンの二国間交流 ～最近のブータンの変化について～

JICAブータンオフィス 須藤 伸

＜セッション3:ブータンとの今後の交流を考える＞

コーディネーター:NPO法人幸福の国(ブータンミュージアム)理事長 月原 敏博

パネリスト: JICAブータンオフィス 須藤 伸

福井まちなかNPO理事長 永井 弘明

主催:NPO法人幸福の国、福井まちなかNPO 後援:福井県(予定)

事務局:090-9761-5180 (永井)

クロス・オーバー（越境）のススメ

脇本 幹雄¹⁾

ブータンミュージアム（BM）の福井市から勝山市移転の際、オープニング・イベントとしてバンド演奏に参加した。それ以前から、BM創設者の野坂夫妻のまちづくりイベントにも参加しており、奇遇を感じている。自身、本業は土木技術者であり、趣味として音楽演奏をしている。BMは国際交流の拠点であり、隣設の音楽喫茶チエチェは音楽の交流拠点でもある。いずれにしても国境やジャンルなどの境を超えることが胆であり、それを信条としている。以下、クロス・オーバー、すなわち、越境の面白さと大事さを論じてみたい。



音楽喫茶チエチェでボサノバを演奏する筆者（中央ギター演奏者）

音楽のクロス・オーバー

カタカナ語は嫌いだが、敢えてこう叫びたい「クロス・オーバー！」日本語にはしにくい、「超えていけ」が近いかもしれない。この言葉は、1970年代に音楽でよく使われ、ロックやジャズなどに区分けされ

1) 著者のプロフィールの記述が本文の最後のところにあります。

たジャンルを跨ぐ新しい音楽を指した。ちょうど私の青春時代と重なり、フォークソングから始まった音楽の興味と活動が、ロック、ブルース、ソウル（R&B）、ラテン、ジャズへとどんどん移り、最後に色んな要素が入り交じったクロス・オーバーになった。今はフュージョン（融合）と呼ぶことが多いが、やはり、クロス・オーバーのほうが飛び越えるエネルギーを感じて好きである。

さて、そのクロス・オーバー、演奏するには色んなジャンルを一応こなせる必要がある。フォークの親密さ、ロックの反骨心、ブルースの悲哀、ソウルのしなやかさ、ラテンの情熱、ジャズの知性、これをみんな具備できたら最高だ。もともと、ロックは弾き語りのブルースが原点にあり、これをエレキ楽器やドラムセットで派手にしたものだし、典型的なクロス・オーバーであるボサノバはラテン音楽、ブラジルのサンバにジャズのエッセンスを注入したものだ。ジャズ・トランペッターのマイルス・デイビスは、ロックとクロス・オーバーしたから帝王になれたのだ。

土木のクロス・オーバー

音楽におけるクロス・オーバーの楽しさと素晴らしさを述べたが、土木の分野においてもこの観点は大切と思う。土木といってもその領域は広く、行政の縄張りでは、河川と道路と都市計画等に分けられている。土木技術者もこの縄張りに拘束されていることが多い。しかし、河川堤防の天端を道路として使う兼用工作物も多くあり、逆に道路盛土が二線堤防となる堤防として機能することもある。公園が遊水地となっている例も

ある。縄張りごとの財源で各施設を整備する関係上、クロス・オーバーすれば、もっと経済的で便利なのだと思うことも多い。九頭竜川を渡る道路橋を担当していた時、新幹線の鉄道橋と一緒にすれば合理的と思い、鉄道・道路の合築橋を提案したが、上司の反対に遭って、なかなか理解を得られなかった。しかし、最終決定者の決断を得て、ようやく実行できた。クロス・オーバーしてしまえば、「何で初めからそうしなかったの」的に当たり前に見えるものなのだ。県土木部では、組織改編により、土木事務所の構成が、従前の地区割式から、河川・道路等の縦割り式になったが、同じ事務所の仲間同士、互いにクロス・オーバーして、より合理的で美しいインフラを整備してほしい。



新九頭竜川イメージ図（福井県作成）

まちづくりのクロス・オーバー

私自身は、土木技術者の役割が基本にあり、河川や道路のインフラ整備の専門家（技術士）として社会貢献したく思っている。一方、まちづく

りは、そのインフラを利用して、よりよい社会をつくることなので、環境や福祉等の専門家との協働なしにはなしえない。河川には水生生物が生息し、その環境を保全しつつ利水・治水しなければならず、それには生態学者の知見が必要である。道路を万人に公平に利用してもらうには、ユニバーサル・デザインの知見が必要なのである。また、インフラ整備に必要な財源を獲得するには、政治・経済の専門家との協働も必要である。さらに立場のクロス・オーバーも必要である。インフラを企画・計画するのは役所（官）であるが、設計・建設するのは民間（産）であり、その高度化・効率化には研究者（学）の協力・支援が欠かせない。産学官連携というクロス・オーバーが必要なのだ。この思いから、それぞれの立場を超えた自由な意見交換の場として、メーリング・リスト（ML）の世話人を務めている。福井県内の河川関係者が集う「ふくい里川研究会」と道路関係者が集う「ふくいの道研究会」である。電子メールによるタダの（本当に無料の）情報交換の場であるが、200人前後の参加者がおり、最新の技術の紹介や問題提起・解決のきっかけづくりに寄与できれば本望である。

先に道路と鉄道の連携ネタを取り上げたが、交通は道路だけのものではない。鉄道やバス等の輸送機関も含めた公共交通もまちづくり的に重要である。これに気付き、「ふくい路面電車とまちづくりの会（NPO法人ROBA）」なる市民団体にも参加し、土木と交通のクロス・オーバーに務めている。その一環として、車に囚われた生活からの解放をめざす国際的なイベント「カーフリーデー」をROBAが中心になって開催し、その

音楽イベントを担当している。その会場は自身が福鉄・えち鉄の相互乗り入れで関わった田原町駅ミュージズであり、奇遇を感じている。



田原町ミュージズでの音楽ステージをかすめる LRV フクラム

砂防事業を担当していた時、溪流を分断する砂防ダムを罪滅ぼしとして、再生可能エネルギー活用することを考え、小水力発電を広める市民団体「福井小水力利用推進協議会」に参加した。現在、事務局を担当している。

最後に、国境、ジャンル、分野は、とりあえず、居所を定めるのに必要ではあるが、それをクロス・オーバーすることが人生の楽しみであり、意義であると感じている。皆さまもぜひ、クロス・オーバーの醍醐味を味わってほしい。

プロフィール

1955年：福井県大野市生まれ、有終西小・有終中・藤島高・京大卒

1979年～2013年：福井県庁（土木職）勤務：河川・道路・鉄道・環境担当

2013年～：佐幸測量設計（株）勤務、技術士として技師長を務める

勝手連として「ふくい里川研究会」「ふくいの道研究会」「北陸の公共交通の未来を語る会」世話人、「福井小水力利用推進協議会」事務局、「ふくい路面電車とまちづくりの会（NPO 法人 ROBA）」「ふくい技術士交流会」理事、「福井地域環境研究会（NPO REF）」幹事を務める

ブータンにおけるJICA海外協力隊の活動

新保 比奈子¹⁾

私はJICA海外協力隊として2022年6月より、ブータンの首都ティンブーにあるブータン最大の国立病院、Jigme Dorji Wangchuck National Referral Hospital（以下、JDWNRH）で活動しています。私は看護師ですが、今回Emergency Medical Responder（以下EMR）として仕事をしています。現在、ブータン国内には約60名のEMR がいます。EMRは日本で言えば、救命救急士です。日本の救命救急士は消防署に所属していますが、EMRは病院に所属し、救急搬送がない場合は救急外来で、看護師とほぼ同じ業務を行っています。EMRは救急搬送時、医師の指示なしで投薬ができます。分娩介助、死亡診断も行います。私も普段はJDWNRHの救急外来で、入室患者の受け入れ、入室している患者の観察、心電図などの検査介助、投薬の介助を行っています。救急車の要請があれば、EMRと救急車に乗り込み救急搬送を行っています。

私は毎月7件前後の救急搬送に従事しています。救急要請は、いろいろな場所、患者も本当に様々です。町の中心部、ガタガタ山道を通り患者を迎えに行くこともあります。主に、消化器症状、呼吸障害などの重症ではない内科症例が多いです。外傷、交通外傷患者もいます。アルコールに関連した患者が多く、JDWNRHの救急搬送患者の24%を占めています。ブータンは、東部では自宅でお酒を作る習慣があり、アルコール摂取に関して寛容な文化であることが影響していると思われます。

1) JICA海外協力隊として派遣中

残念ながら、到着時にすでに亡くなっているケースもあります。泣き崩れる家族に、EMR、救急車の運転手が、家族にすでに亡くなっていることを伝え、なぐさめます。EMRは20代が多いですが、彼らの患者対応から学ぶことも多いです。

他の県にでかけたとき、私が以前救急車で迎えに行った患者の家族の方と会う機会があり、「以前、うちの祖母があなたに救急車で迎えにきてもらった。ありがとう」と声をかけてもらったことがあります。最初は、驚きましたが、うれしかったです。

私は、EMR養成コースの学生の授業も担当しています。学生達は実習で、救急外来に来ます。学生と救急車に乗り患者を迎えに行くこともあります。学年が進むにつれ、学生達の表情が変わってきます。学生の成長にも元気をもらっています。



ブータンでのJICA海外協力隊派遣35周年式典で、カウンターパート（共に働くパートナー）と共に

不思議な出会い

栗原哲朗¹⁾ ソナム・チョキ²⁾

今から遡ること十数年前に、福井県大野市在住の写真家M氏がブータンを旅行中、ブムタンで、制服を着た下校中の女子中学生にたまたま遭遇し、写真を撮らせてもらいました。その数年後の2011年11月、ブータン国王夫妻が初めて日本を訪問されたのを機会に、ブータンに大変興味を持たれた福井市在住N氏は早速ブータンを訪問し、帰国後、同市内にブータンを紹介するミュージアムを創設することを決意し、2012年10月にオープンしました。その際に、同ミュージアムを紹介するポスターやチラシに、M氏の撮った女子中学生の1枚の写真を本人の許諾なく使わせていただきました。彼女の消息がつかめなかったので、許諾を得るすべがなかったからです。でも、その後、やはり何とか彼女の許諾を得たいと考え、その後、ブータンを再度訪問したN氏が、ブータン政府に相談したところ、彼女の着ていた制服からすぐに消息が判明し、N氏はようやく彼女（ソナム・チョキさん）に会うことができました。その時には、すでに彼女は首都ティンブーにある大学に通う学生でした。こうした縁から、彼女はN氏に招待され、福井に来られることになったのです。最初の福井訪問は約2カ月、その後、2度目の来県の際には約2年半、N氏宅で生活を共にしました。ミュージアムが2020年に福井市から勝山市へ移転したことに伴い、N氏も住まいをその近くに移し、彼女の生活拠点もそちらになりました。その後、2022年夏に福井県での生活に別れを告げ、彼女はオーストラリアへ活動拠点を移されました。以下は、ソナムチョキさんの生い立ちと、福井での思い出やホストペアレンツ、出会った人たちへの感謝の言葉をお寄せ下さったので、紹介します。

1) ブータンミュージアム事務局 2) Sonam Choki:在オーストラリア

Name: Sonam Choki

Occupation: Newly started Dental Assistant

Passions: Hiking and Outdoor Exploration

Bio: A diligent and motivated individual who graduated with a bachelor's degree in commerce (BCom) with focus on Finance and who finds solace and adventure in the great outdoors.

With a deep passion for hiking and outdoor exploration, I embarked on countless adventures, discovering the beauty and serenity of nature.

Growing up surrounded by nature in Bumthang, Bhutan, developed a love for outdoor activities from a young age. As I explored the nearby mountains and trails, my passion for hiking bloomed. I quickly realized that hiking not only provided physical exercise but also offered a unique opportunity to disconnect from the hustle and bustle of daily life and reconnect with the natural world.

During my stay in Fukui, Japan, I had the wonderful opportunity to engage in outdoor activities such as hiking with my host mom. This experience allowed me to not only explore the breathtaking natural landscapes of Fukui but also bond and create lasting memories with my host family.

Overall, the experience of hiking with my host mom in Fukui was not only a chance for me to explore the natural beauty of the region but also a way to strengthen my bond with my host family and immerse myself in the local culture. It was a memorable experience that I will cherish for years to come.

Whether it's conquering new peaks or simply enjoying a

leisurely stroll in nature, I embodies the spirit of adventure and the love for the great outdoors. My passion for hiking serves as a reminder to all that there is a world of beauty and wonder waiting to be discovered just beyond our doorstep.

“A Heartfelt Gratitude to the Beloved god gifted parents”:

Throughout my two and a half years in Fukui Prefecture, Japan, I have been blessed to encounter the unwavering love and kindness of the people, especially my Japanese parents (Nosaka Genji & Nosaka Michiyo) in Fukui, Japan. As an individual who spent two and a half years in Japan, I had the immense privilege of being welcomed into a loving and nurturing Japanese family. This article aims to shed light on the profound impact my god-gifted parents had on my life and the gratitude I hold for their unwavering support and care.

An Unexpected Blessing: My journey with them in Fukui began unexpectedly. As circumstances aligned, I found myself in a foreign land, far away from my place of birth. Little did I know that this journey would lead me to the most incredible gift of all - a loving and supportive family. My god-gifted parents opened their hearts and home to me, offering me a sense of belonging that I had never experienced before.

Unconditional Love and Acceptance:

From the moment I stepped into their lives, my parents showered me with unconditional love and acceptance. They embraced me as their own, treating me with kindness, compassion, and understanding. Despite the cultural and language barriers, their love transcended any differences,

creating a sense of unity and warmth within our family. Their unwavering support became the foundation upon which I could grow and thrive.

Creating Cherished Memories:

During my time with them, we created countless cherished memories together and will forever hold a special place in my heart. From exploring the beauty of Fukui prefecture to sharing meals filled with laughter and joy, every moment spent with them was precious. Their love and care made even the simplest of experiences feel extraordinary. These memories will forever be etched in my heart, reminding me of the immense gratitude I hold for the time we shared.

Expressing Gratitude: It is with a deep sense of gratitude that I reflect upon my journey with them in Fukui, Japan. Their love and support have shaped me in ways I could never have imagined. Though words may fail to fully capture the depth of my appreciation, I am committed to expressing my gratitude in any way I can. Their presence in my life will forever be a cherished gift, and I am forever indebted to them for their unwavering love and kindness.

Conclusion:

To my god-gifted parents in Fukui, Japan, I offer my heartfelt gratitude. Your love, acceptance, and guidance have transformed my life in immeasurable ways. The memories we created together will forever hold a special place in my heart. I am forever thankful for the time we shared and the love you bestowed upon me.

“Also, I am incredibly grateful to all the wonderful people I have had the privilege of knowing in Fukui during my two and a half years of stay. Their kindness, support, and assistance in various aspects of my life have made my time here truly special. From their warm welcome and guidance to their friendship and willingness to lend a helping hand, I am forever thankful for their presence in my life. Their impact on me will be cherished and remembered always.”

Thank all you for making my stay in Fukui truly exceptional.
TASHI DELEK

Snapshots of Ms Sonam Choki with her god-gifted parents



参考資料 参考までに投稿原稿を日本語に翻訳しました。(編集者)

名前：ソナム・チョキ

就職：歯科助手として働き始めたばかり

情熱：ハイキングとアウトドア探検

略歴：財政学に重点を置いた商学士号 (BCom) を取得してRTCを卒業し、大自然の中に安らぎと冒険心を見出している勤勉で意欲的な人物です。

ハイキングやアウトドア探検に深い情熱を持って、数え切れないほどの冒険に出かけ、自然の美しさと静けさを発見しました。

ブータンの Bumtan で自然に囲まれて育ち、幼い頃から戸外での運動が大好きでした。近くの森や山を探索しているうちに、ハイキングへの情熱が開花しました。ハイキングは身体を動かすだけでなく、日常生活の喧騒から離れて自然界と再びつながるユニークな機会でもあることにすぐに気づきました。

福井に滞在中、ホストマザー（私が福井にいたとき野坂美智代様に対して使っていた呼び名）と一緒にハイキングなどの戸外活動を行う素晴らしい機会に恵まれました。この経験により、私は福井の息を呑むような美しい自然の風景を眺めるだけでなく、野坂さんご夫妻との絆を深め、いつまでも心に残る思い出を作ることができました。

全体として、ホストマザーと一緒に福井でハイキングをした経験は、私にとってその地域の自然の美しさを探索する機会になっただけでなく、地元の文化に浸ることもできる機会でもありました。またそれは私が今後何年も大切にしたい思い出に残るものでもありました。

自分にとって新しい山の頂に登るときでも、単に自然の中でのんびり散歩を楽しむときでも、私は冒険心と大自然への愛を感じます。ハイキングに対する私の情熱は、私たちのすぐそばに美と驚異の世界が発見

されるのを待っていることを、すべての人に思い出させるのに役立ちます。

愛する神から恩恵を受けた両親に心からの感謝：

福井県での2年半を通して、私は日本の人々特に両親（以下野坂弦司様と野坂美智代様のこと）の揺るぎない愛と優しさに出会うことができ、幸せでした。日本で2年半を過ごした個人として、私は愛情深く育ててくれる日本の家族に迎え入れられるという計り知れない特権に恵まれました。ここに書いている記事は、神から授かった両親が私の人生に与えた計り知れない影響と、両親の揺るぎない支援と配慮に対して、私が抱いている感謝の気持ちを明らかにすることを目的としています。

予期せぬ祝福：

両親との福井の旅は全く予期しないまま始まりました。状況が整い、私は自分が生まれた場所から遠く離れた異国の地にいることに気づきました。この旅が私を何よりも素晴らしい贈り物、つまり愛情深く協力的な家族に導かれることになることは、私はほとんど考えられませんでした。神に恵まれた両親は私の心を開いてくださり、これまで経験したことのない帰属意識を私に与えてくださいました。

無条件の愛と受け入れ：

私が両親の生活に足を踏み入れた瞬間から、両親は無条件の愛と受け入れを私に注ぎ込みました。両親は彼らは私を自分のものとして受け入れ、優しさ、思いやり、そして理解を持って接してくださいました。文化や言語の壁にもかかわらず、両親の愛はあらゆる違いを超え、私たちの家族に一体感と温かさを生み出していました。両親の揺るぎないサポートは、私が成長し、希望をもって生きるための基盤となりました。

大切な思い出を作る：

両親と一緒に過ごした間、私たちは数え切れないほどの大切な思い出を一緒に作り、私の心の中で永遠に特別な場所を保つでしょう。福井

県の美しさを探索したり、笑いと喜びに満ちた食事を共有したり、両親と一緒に過ごしたすべての瞬間は貴重でした。両親の愛と配慮は、最も単純な経験さえ、特別なものを感じさせて頂きました。これらの思い出は永遠に私の心に刻まれ、私たちが共有した時間に対する私が抱えている計り知れない感謝の気持ちを永く思い出させます。

感謝の気持ちを表明する：

深い感謝の気持ちを込めて、日本の福井での両親との旅をいつまでも振り返ります。両親の愛と支援は、私が想像もできなかった方法で私を形作りました。言葉では感謝の気持ちを十分に表現できないかもしれませんが、できる限りの形で感謝の気持ちを表現したいと思っております。私の人生における両親の存在は永遠に大切な贈り物であり、両親の揺るぎない愛と優しさに私は永遠に感謝してまいります。

結論：

日本の福井にいる、神に恵まれた両親に、心からの感謝を申しあげます。あなたの愛、大きな受容心、そして優しい導きは、私の人生を計り知れないほど変えて頂きました。私たちが一緒に作った思い出は、私の心の中で永遠に特別な場所に残ります。私たちが共有した時間とあなたが私に与えてくれた愛に永遠に感謝します。

また、2年半の滞在中に福井で知り合う機会に恵まれた素晴らしい人々全員に心から感謝してあります。私の人生のさまざまな面での両親の優しさ、思いやり、そして援助は、ここでの私の時間を本当に特別なものにして頂きました。両親の温かい歓迎と指導から、両親の友情と援助の手を差し伸べる意欲に至るまで、私は私の人生における両親の存在に永遠に感謝してまいります。両親が私に与えた影響は大切にされ、常に記憶されるでしょう。

私の福井での滞在を本当に素晴らしいものにしていただき、ほんとうにありがとうございました。 タシ・デレ

Gyalsung – Bhutan’s National Service

Ugyen Dorji¹⁾

National Service in various forms has existed in the history of many countries, even Japan or is still prevalent in some countries, most popularly, the South Korean mandatory military service. From 2024, every Bhutanese youth shall also undergo a mandatory ‘*Gyalsung program*’, Bhutan’s National service.

The national day, 17th December, is one of the most significant days in Bhutan and the royal speech addressed by His Majesty the King on the national day is listened to and read by almost all Bhutanese. During one such speech in 2019, His Majesty the King announced the launch of Gyalsung, Bhutan’s National Service. The rationale the king had envisioned for the launch of Gyalsung was that every youth in the country would participate in the process of nation-building by empowering the youths to become more productive and responsible citizens. All Bhutanese youth attaining the age of 18 must be enrolled and undergo Gyalsung training.

The Gyalsung training shall comprise of two main components, *Basic military training* and *Skill Development*. The total duration of the training is one year. The first three months shall be for military training and in the remaining months, each cadet shall undergo skill development programs. The various skilling programs currently identified include, *Food Security, Home Security, Community Security, and Information and communications Technology Security*. The cadets can choose

1) Gelephu Higher Secondary School, Bhutan

any specialization program of their choice but a balance would be made between personal interest, availability, and equal distribution. Besides the military and skilling program, the Gyalsung training also includes various other additional activities that would further deepen and help value Bhutan and its culture such as trekking through parts of the 403 km Trans Bhutan trail and attending courses on National Education, Bhutanese values, transformative leadership which will be conducted by respective specialists. There are four Gyalsung training centers.

The Gyalsung program will be launched in September 2024. The first batch of the Gyalsung training would only be for four and half months, from 1st September, 2023 to 15th January, 2024. The training would include military training and other additional courses but not a skilling program due to the shorter duration of training. The next Gyalsung training would be for one year. Since the announcement of the registration of the first Gyalsung training on 9th October, 2023, the schools have assisted in registering eligible students for the training. Students who are 18 years old but haven't completed high school and are still studying, can register and apply for deferment.

In preparation of the students for the Gyalsung program, Gelephu Higher Secondary School, one school in southern Bhutan, instituted its own preparatory program for students of 12th grade in 2023. A total of 170 students would graduate from the school and thus be eligible to undergo Gyalsung. The

students were divided into four groups and in each group they were given basic training on drills, identifying and following commands, and line formations, and for those students that cannot, they were trained to ride a bicycle. Each group was given training by student scout leaders who had already received such intensive training during the scout leadership program. Teachers were assigned to each group to monitor and support the training. The trainings were conducted every Saturday. The conduct of such preparatory programs was totally dependent on the schools, and as such, many other schools did not conduct such programs.



Preparation for Gyalsung in Gelephu HSS

I would have most readily and with pride joined Gyalsung, if such a program was available when I was 18 years old. I honestly believe that if Gyalsung was available many aspects of

my life would be different, for the better. Similarly, the military training program would ensure every youth is physically athletic and disciplined, and the various skilling programs would equip youths with different skills at a young age, which in the future would lead to making healthy and competent adults. This is of great significance when we consider the fact that the coming generations of youths are those that are brought up in the age of smartphones and social media when much of their time is spent in front of screens.

The Gyalsung will also serve as a kind of home-coming for youths, brought up in foreign countries. Currently, besides the capital city of Thimphu, which is the region with the highest population of Bhutanese, the next region on the list with the second highest number of Bhutanese is, Australia. And the number of Bhutanese moving to Australia is increasing every year. The next generation of children born to Bhutanese migrating to Australia would have a very minimal association with Bhutan and its culture, so Gyalsung would require them to come back home and experience Bhutan and the cultures of their forefathers.

Ugyen Dorji

Gelephu Higher Secondary School

Bhutan

ギャルスン-ブータンの国家奉仕活動

ウゲン・ドルジ

さまざまな形の国家奉仕活動は、日本を含む多くの国の歴史の中で存在してきたか、あるいは一部の国では今でも広く行われており、最もよく知られているのは韓国の兵役制度です。2024年からは、すべてのブータンの若者もブータンの国家奉仕である「ギャルスン計画」を義務的に課せられることとなります。

12月17日の建国記念日はブータンにとって最も重要な日の1つであり、その日に国王陛下によって発表される国王演説は、ほぼすべてのブータン人によって聴かれ、読まれます。2019年のそのような演説の中で、国王陛下はブータンの国家奉仕活動であるギャルスンの発足を発表されました。国王陛下がギャルスンの発足について思い描いていた理論的根拠は、国内のすべての若者が、より生産的で責任ある国民になるような力を与えられて、国家建設のプロセスに参加するというものでした。18歳に達したすべてのブータンの若者はこの計画に登録して、訓練を受けなければなりません。

ギャルスンの訓練は、基礎軍事訓練と個人の技能開発の2つの主要な要素で構成されます。訓練の合計期間は1年です。最初の3か月間は軍事訓練を受け、残りの数か月間は、各々研修生として技能開発プログラムを履修します。現在確認されているさまざまな技能開発プログラムには、食料安全保障、家庭安全保障、地域安全保障、情報通信技術安全性などが含まれます。研修生は任意の専門プログラムを選択できますが、個人的な興味、利用可能性、均等な配分の間で調整がとられます。ギャルスンの訓練には、軍事および技能開発プログラムのほかに、403kmのブータン横断道路の一部をトレッキングしたり、国民教育、ブータンの価値観、変革に関するコースに参加したり

するなど、ブータンとその文化の理解をさらに深め、その価値を評価するのに役立つさまざまな追加アクティビティも含まれています。また、それぞれの専門家はリーダーシップを発揮します。

ギャルスンプログラムは 2024 年 9 月に開始される予定です。ギャルスン訓練所は 4 つあります。ギャルスン訓練の最初のバッチは、2023 年 9 月 1 日から 2024 年 1 月 15 日までのわずか 4 か月半です。訓練には軍事訓練やその他の追加コースが含まれますが、技能プログラムは含まれません。トレーニング期間が短くなるからです。次のギャルスンの修行は 1 年間です。

グレフ HSS でのギャルスンの準備

2023 年 10 月 9 日に最初のギャルスントレーニングの登録が発表されて以来、学校はトレーニングに適格な生徒の登録を支援してきました。18 歳だが高校を卒業しておらず、まだ勉強中の学生は、登録して延期を申請できます。

ギャルスンプログラムへの生徒の準備として、ブータン南部の学校であるグレフ高等学校は、2023 年に 12 年生の生徒を対象とした独自の準備プログラムを創設しました。合計 170 人の生徒が学校を卒業し、ギャルスン入隊への受験資格を得ることになります。

学生は 4 つのグループに分けられ、それぞれのグループで訓練、指示の識別と従うこと、ライン形成などの基礎訓練を受け、それができない学生には自転車の運転訓練を受けました。各グループはスカウトリーダーシッププログラム中で、既にそのような集中的な訓練を受けていた学生スカウトリーダーによって訓練を受けました。各グループには教師が割り当てられ、トレーニングを監視しサポートしました。訓練は毎週土曜日に行われました。このような準備プログラムの実施

は完全に学校に依存しており、そのため他の多くの学校はそのようなプログラムを実施していませんでした。

もし私が 18 歳のときにそのようなプログラムがあったなら、私は直ちにそして誇りを持ってギャルソンに参加したでしょう。もしギャルソンが利用できたら、私の人生の多くの側面がより良い方向に変わっていただろうと私は正直に信じています。同様に、軍事訓練プログラムは、すべての若者は身体的に運動能力があり、規律が保たれていることを保証し、さまざまな技能プログラムは、若者に幼い頃からさまざまなスキルを身につけさせ、将来的には健康で有能な大人を育てることにつながるでしょう。これは、これからの世代の若者がスマートフォンやソーシャルメディアの時代に育ち、多くの時間をスクリーンの前で過ごすという事実を考えると、非常に重要です。

ギャルソンは異国で育った若者にとって一種の故郷の場所でもあります。現在、ブータン人の人口が最も多い地域である首都ティンブーに加えて、次にブータン人の数が多い地域はオーストラリアです。そしてオーストラリアに移住するブータン人の数は年々増加しています。オーストラリアに移住しているブータン人として生まれた次世代の子供たちは、ブータンやその文化との関わりがほとんどないため、ギャルソンはその子供たちに故郷に戻ってブータンや先祖の文化を体験するよう要求すると思います。

ウゲン・ドルジ
ゲレフ高等学校
ブータン

My story and my aspirations

Yangchen Lhamo¹⁾

My name is Yangchen Lhamo, and I am sixteen years old. I am in the eleventh grade. I study in Gelephu Higher Secondary School. My mother, father, and three siblings make up my family. All three of my siblings attend school. While my mother stays at home, my father works as a public servant. As an elder sister, I take care of my siblings and help my mother in doing household chores. In the future, I hope to become a doctor.

Living in Bhutan is a breathtaking and serene experience. The people of Bhutan are courteous and nice. I live in Gelephu town, in the southern region of Bhutan. It is a small town, and like any other town, it has restaurants and cafes, a separate vegetable market, a clock tower, a park, and swimming pools. The summer in Gelephu is scorching hot but winter is pleasant. The winter weather is ideal for conducting musical events, official seminars, and for swimming and picnics by the numerous rivers around the town. Thus, the nearly deserted Gelephu in summer comes to life in the winter months.

Gelephu Higher Secondary School is a wonderful and supportive school and has produced many talented students. There are around 800 of us in the school this year. My time at school has been a remarkable experience of growth and learning. Every day, from the first day of primary school to the present day of high school, has been a story of challenges,

1) Gelephu Higher Secondary school, XI grade

friendships, and ups and downs. I remember the thrill of the first day of school, getting to know new students, and mastering reading and writing. The homework got harder as the years went by, but I had a great group of teachers who were always willing to lend a hand when I needed it on tough subjects. I joined clubs and extracurricular activities, found my passions and interests, and made friends for life along the way. When I reflect, I see how much my time in school has shaped the person that I am today.

I usually get up at six during the school days. I spent an hour and a half helping my mom with chores and getting my siblings ready for school. I move for school from the house at 7:30 and meet up with my friends to wait for the school bus. The two closest friends I have are constantly together, and they live close by. On the bus, I have to stand up most of the time because there aren't enough seats. The trip to the school takes more than half an hour, considering the constant stoppage to pick up students. School schedules begin at 8:30 with a session with class teachers or a general gathering of all students. Classes begin at nine and end at three twenty. Our daily schedule consists of eight periods. I choose to study science and have English, Dzongkha, Maths, Chemistry, Biology, and Physics as my subjects. I find English to be a fun topic and enjoy learning it. I leave the school after four in the evening and reach home by around five. I spent some time resting and then help my mom with chores. From 7 to 10 I dedicate my time to homework and study.

Bhutanese children are extremely lucky to be able to avail free education, which qualifies them for a wide range of employment. In addition to education, there are venues where young people can showcase their abilities and develop new skills in preparation for better futures. To keep youth interested, motivated, and positive, there are varieties of platforms, including those for singing, dancing, writing, games, and other activities. With the offered platforms, adolescents can increase their self-worth, pleasure, and confidence. When allowed to showcase their talents on stage, a great number of young people feel liberated.

I consider myself extremely fortunate to have been born and grown up in this peaceful nation where everyone is comfortable and joyful. I want to use this opportunity to express my gratitude to the people in my life. Besides free education, Bhutanese also enjoy free health services. In villages, people support one another and labour together so that nobody is left to beg. Bhutanese are religious and most of us are Buddhist. Bhutan has also gained recognition as a desirable travel destination. The people of Bhutan are always welcome and willing to greet and assist international visitors.

Yangchen Lhamo

Gelephu Higher Secondary school, XI grade

私のこと・私の抱負について

ヤンチェン・ラモ

私の名前はヤンチェン・ラモでゲレブ高等学校の11年生です。家族は学校に通う3人の兄弟と両親です。母は主婦で、父は公務員です。長女として私は弟妹の面倒を見たり、母の家事手伝いをしたりしています。将来医者になりたいと考えています。

ブータンでは、すばらしく平穏な生活を送っています。ブータン人は礼儀正しく、よい人です。私の住む町は、ブータンの南部ゲレブです。小さな町で、ほかの町と同じように、食堂やカフェ、野菜市場、時計台、公園、プールがあります。ゲレブの夏は猛暑ですが、冬は快適です。冬の天候は、音楽イベントや公的なセミナーを開くには理想的で、町を流れるいくつかの川でのピクニックや水泳に適しています。このように、夏は人気(ひとけ)のないゲレブですが、冬になると活気溢れています。

ゲレブ高等学校はすばらしく、協力的な学校で、多くの有能な学生を輩出しています。今年の在校生数は約800人です。学校で過ごす時間は、成長と学びのすばらしい体験ができる場です。小学校入学の一日目から、高校の今日に至るまで毎日が挑戦と友情、浮沈みの連続です。学校初日のわくわく感、新しい友達と知り合うこと、読み書き習うことなど今でも覚え

ています。学年が上がるにつれて宿題は難しくなってきましたが、困難な教科にぶつかっても優れた先生方がいつも助けてくださいました。私はクラブや課外活動に参加し、やる気や興味を見つけ、その過程で友達もできました。振り返ってみると、学校で過ごしたどれほど多くの時間が今日の私を形成してくれたかがわかります。

学校のある日は普通6時に起床。母の家事を手伝ったり、弟や妹の登校準備を手伝ったりして1時間半ほど過ごします。7時半に家を出て、友達とスクールバスを待ちます。仲のいい友達二人といつも一緒に、家も近いです。バスでは座席がなくて、ほとんど立っています。学校へは途中生徒を拾いながら行くので、30分以上かかります。学校は8時半始業で、ホームルームや全校集会などがあり、授業は9時から3時20分までです。毎日8時間あります。私はサイエンスを選択し、教科として英語・ゾンカ語・数学・化学・生物・物理を取っています。英語は話題も楽しく勉強しています。午後4時過ぎに下校して、5時頃帰宅します。ちょっと休んでから母の手伝いをします。7時から10時までは宿題と勉強の時間です。

ブータンの子どもたちは自由に教育を受けることができ非常にラッキーです。それによって幅広い領域の職を得ることができます。教育のほかにも、若者が能力を発揮して、将来へのより良い準備のための新しい技能を伸ばすことのできる場があります。若者の関心を継続させ、動機づけを持たせ、積極性を持たせ続けるために様々な機会があります。歌・ダンス・ライティング・ゲームやそのほかいろいろな活動の場があります。提供された機会では若者は自尊心・喜び・自信を持つことができます。ステージ上で若者がその才能を見せることができれば、多くの若者は開放感を感じるでしょう。

皆だれもが快適で楽しいこの平和な国に生まれ育ったことを非常に幸運なことだと思います。このチャンスを使って生涯ずっと私の感謝の気持ちを表わしたいと思います。自由な教育に加え、ブータン人は健康を維持するサービスを享受できます。村ではお互いが助け合い、一緒に働くことで、誰も一人に放ったらかされることはないのです。ブータン人は宗教心が厚く、ほとんどが仏教を信じています。ブータンはまた好ましい旅行の目的地としての認知も受けています。

ブータン人は外国からの訪問客を常に歓迎し、挨拶と手助けを惜しみません。

ヤンチェン・ラモ

ゲレフ後期中等学校、11年生



ゲレフ後期中等学校(HSS)キャンパス

最近のクエンセルの記事を読んで そのVII

第4次国民議会選挙について

奥村 彰二¹⁾

この表題の文書は、ブータンミュージアム通信14号から書き始めて、17号まで、4編を続けて投稿していました。その後この原稿を書くことが滞っていたら、この機関誌そのものの発行が滞ってしまいました。3年程前の第19号に「・・・ そのVI」を書きましたので、ここでは、「・・・ そのVII」を表題として、2023年11月30日に行われた第4次国民議会の予備選挙と2024年 1月9日に行われた同じく第4次国民議会の総選挙の経過について、いろいろ気づいたことを書き加えて、解説文を書きたいと思います。ただ、1つ前の「・・・ そのVI」の文書に書かれていた内容は、今回の選挙の流れに、密接な関係があるように思います。

2023年10月30日に、ブータンの国会である国民議会が解散され、多くの議員にとっては、第4次国民議会選挙の闘いのスタートが切られました。国会解散に際しては、これまで5年間首相の座にあったロティ・ツェリン氏にとっては、約2週間後にその任期が終了するので、恒例により記者会見を行っています。クエンセルの記者により、その場でのロティ・ツェリン氏の発言や様子は、「首相の反省」という題名で社説として発表されています。この記事によると、間近に迫っている選挙に向けて党首としての業績を語ることもできた筈でしたが、自己の政治的成果に対しては極めて謙虚で冷静に評価しながら、首相としての5年間を振り返っていました。

ブータン選挙管理委員会（ECB）は、既に予備選挙に立候補者を出した5つの政党から提出されていた各政党からのマニフェストについて、匿名の独立専門家委員会を開いて、1か月にわたる審査を行ない、11月1日にECBは提出されていた全政党のマニフェストを承認しました。マニフェストは言うまでもなく、各政党が選挙に当選した場合、どのような政治を行うか、有権者と誓約または約束をすることをまとめたものであり、有権者と立候補者の両者にとって非常に重要な文書

1) NPO法人「幸福の国」副理事長

であると考えられます。クエンセルは、11月中にブータンの有権者が選挙のマニフェスト文書のインターネットアドレスを示すとともに、各党のマニフェストをそれぞれ2ページほどの短い記事としてまとめて掲載していました。筆者もこれらの記事は、最初各党の主張が容易に理解できて有難いと思い、ブータンミュージアムのホームページでも、それらを紹介しました。しかし、これらの記事によって各党の本当の違いはどこにあるのか、といった疑問に答えようとするには、とても不十分な内容であると感じました。そのため各党が出しているマニフェストの内容を直接、もっと詳しく調べたいと思いました。しかし、各党から公開されている英文のマニフェストはとても立派な文書で、すぐに簡単に読めるものではありませんでした。

英文マニフェストのpdfファイルの大きさは、PDPは、A4 138ページ、ファイルの大きさ10.7MB、BTPは、63ページ、18.3MB、DPTは、52ページ 1.7 MB、DNTは96ページ、1.3MB、DTTは、110ページ、6.7MBの大きさでした。なお、これらのファイルサイズは、ファイルの中の画像の大きさと、数にほとんど依存しているものです。

国民議会の選挙は2回の選挙に分けて行われ、1回目（first round）の選挙を予備選挙、2回目(second round)を総選挙、本選挙などと日本語では呼ばれています。

1回目の選挙は、11月30日に行われ、クエンセルでは12月1日にその結果が発表されました。12月1日には、クエンセル上で「PDP圧倒的な驚くべき選挙結果」、「PDPはとんだ驚きを爆発させている」などのタイトルをつけて、ツェリン・トブゲイ党首が率いるPDP（People's Democratic Party）が、47選挙区中39選挙区で勝利を収めるなど予想外の大勝利となったこと、また、この選挙に新しく参戦したペマ・チュワン党首が率いるBTP（Bhutan Tendrel Party）の得票数が第2位となり、2024年1月9日に予定されている2回目の選挙で、PDPと政権与党の座を争うことに決まったことが報じられました。なお、日本では、PDPは国民民主党または人民民主党、BTPは縁起党または傾向党などと呼ばれています。

この予備選挙で、これまで政権を担ってきたロティ・ツェリン党首の率いるDNT (Druk Nyamrup Tshogpa) (協同党)は敗退し、総選挙で政権与党になることを争うことなく、国会での座席を全部失い、国会から姿を消すことが決まりました。

今回のこれまで選挙も入れて、過去3回の国民議会の選挙において、政権与党が引き続き政権を担うことが、国民から拒否されたことになったので、「ブータンの国民は、1つの政党が2期続けて政権を担うことを嫌う」というブータン国民に対する一般的な見方が取り沙汰されているように思えますが、これはどの程度に正しい見方なのかどうは、十分検討しなければならないと思います。

下に示す国民議会選挙の結果は、en.wikipedia.org/wiki/のウェブサイトの表を基に、表を書き直したものです。

国民議会選挙の予備選挙と本選挙の結果

政党名	1 回目選挙		2 回目選挙	議席数
	得票数	%	得票数	
PDP (<u>People's Democratic Party</u>)	133,217	42.54	179,652	30
BTP (<u>Bhutan Tendrel Party</u>)	61,331	19.58	147,123	17
DPT (<u>Druk Phuensum Tshogpa</u>)	46,694	14.91		0
DNT (<u>Druk Nyamrup Tshogpa</u>)	41,106	13.13		0
DTT (<u>Druk Thuendrel Tshogpa</u>)	30,814	9.84		0
Total	313,162	100.0	326,775	47

予備選挙の決着がついた後、ブータン選挙管理委員会（ECB）へ総選挙に立候補する候補者の推薦が、ブータン・テンドレル党（BTP）と国民民主党（PDP）によって、12月4日から開始されました。その後、総選挙を争うために二つの政党によって指名された候補者は、12月9日までに、関係する選挙管理官に指名書類を提出されます。選挙管理官は、候補者からECBに提出された指名書類を精査して問題がなければ、その候補者が立候補することを正式に受理したことを候補者に伝えます。受理を受けた候補者たちは、12月12日から総選挙運動をスタートさせました。

2つの政党で争う総選挙期間における選挙運動は、予備選挙のときと同じよう激しく、クエンセルは、2つの政党の立候補者94人のインタビュー記事を連日、3、4人づつぐらい載せていました。選挙結果の予想記事も、出されていました。

振り返って、2013年の予備選挙で勝ち残った政党はPDPとDPTでした。DPTの得票数は、PDPの得票数よりかなり上回っていましたが、本選挙でPDPがDPTの倍以上の議席を獲得して勝利しました。一方、2018年の予備選挙で勝ち残った政党はDNTとDPTでしたが、2つの政党の得票の差はごく僅かでした。しかし、本選挙では30議席対17議席で、DNTが圧勝してしまいました。こういう過去の傾向から、今回の選挙でも、BTPも勝つチャンスは大いにあるという見方をする人がかなりいたようでした。

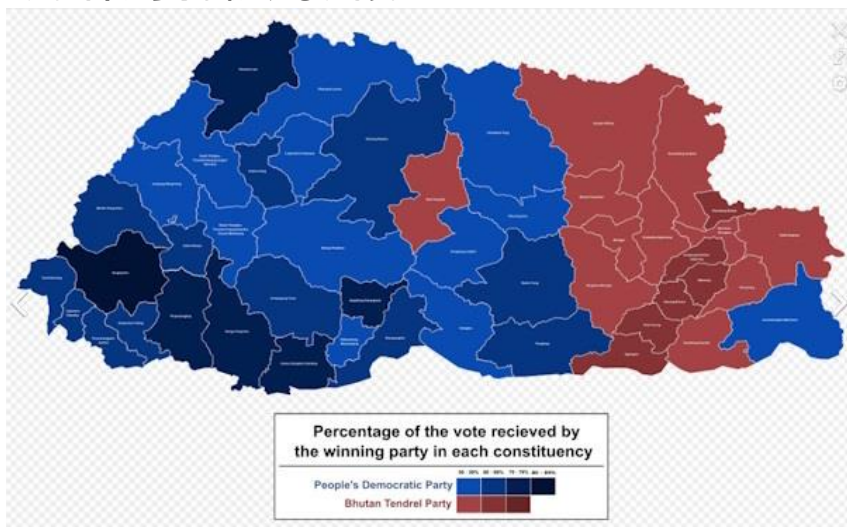
本選挙は1月9日に投票が行われ、その翌日のクエンセルにはその結果が発表されました。結局2013年から2018年までブータンの首相であったツェリン・トブゲイ氏が首相に返り咲いたことになりました。

2018発表された後、BTPのペマ・チュアン党首はクエンセルの記者に「BTPは少なくとも32議席を獲得すると予想していた」と語っていました。さらに、「BTPは議会で強力な野党を形成し、強力な野党として将来に向けた足跡を残したいと考えている」と述べたと報じられました。

クエンセルはこの選挙結果について、1月10日には「PDPによる統

治の変化」、11日は「選挙の意味」という表題で、先の国会選挙について社説を出している。10日の社説では、「PDPが47選挙区中39選挙区で勝利を収めた予備選での優位性を再現できなかった」と述べ、「17議席を獲得したブータン テンドレル党（BTP）は、政府内の抑制と均衡を維持するために不可欠な重要な野党となっている」とBTPの選挙での健闘を称え、BTPのこれからの野党として活躍を期待している。11日の社説でも、ここで今述べた10日の社説と同じような見解を述べた後、これも11日の社説で述べられていることであるが、下に本選挙の結果を地図で示したのを見れば明らかなように、選挙結果に地域性があるとか、地域に偏った選挙結果が現れていることについて言及している。11日の社説では、「人々が地域への所属に基づいて投票したかもしれないと信じさせる可能性がある。これは本当ではない」と地域効果を否定して、PDP 政府が選挙期間中に掲げた公約を果たすのではないかと期待が高まっている」と締めくくっています。

本選挙の結果を地図上に色別して表したもの。en.wikipedia.org/wiki/のウェブサイトから写し取ったものです。



追加原稿：

DNTは、2018年後半から、「ブータン社会の格差を無くす」というビジョンを掲げて、教育改革、水力発電計画の推進、医療の充実などを目指して政治改革を進めようとしていました。首相就任後、DNT政権はすぐに新型コロナの感染による世界的なパンデミックに見舞われましたが、最後はそれを見事に克服したと思われました。しかし、一昨年の後半ぐらいから、貿易収支の悪化、若者の就職難、教員・技術者・若者のオーストラリア移住者の急激な増加などがさらに明らかとなり、これらの問題に対処するための政治改革が目立ち始めました。

日本でのブータンの研究会でも、ブータンは変わった、という言葉がしばしば聞かれました。DNTとしては、これまで考えられた政治改革は進行途上にあるため、是非とも今後与党であり続けていきたいという気持ちが強かったと思われまます。

予備選挙に勝ち残って、今後国会での政治に参加できることが保証された2つの政党にとって、つい数ヶ月前まで政権を担ってきた政党の考えも十分参考にしていかなければならないと思います。昨年11月に発表されたDNTのマニフェストの中の「私たちのビジョン」という章題の一部の文章を、この原稿の最後にそのままつけておきます。

私たちのビジョン

後発開発途上国（LDC）のリストから卒業するにあたり、私たちは皆、国王陛下と歴代政府の指導の下で成しとげてきた計り知れない進歩を誇り思うことができます。しかし、国王陛下が思い描いた、遅くとも2034年までに先進国になるという目標の達成には程遠い感じ です。先ほども述べたように、私たちのビジョンは明確です。それは2034年までにブータンがより強く、健康で、安全で、繁栄し、団結し(united)、自立し、繁栄した先進国となるためのものです。

時間は限られており、私たちは団結してより一層の努力をし、そのビジョンの達成に貢献しなければなりません。私たちはすでに大規模な改革に取り組み、職場の効率を高める取り組みを開始しています。

すべての機関、あらゆる分野でのデジタル化とテクノロジーの導入は、私たちの政党の取組みであり、インフラストラクチャの構築に多額の投資を行ってきました。私たちは国家デジタルアイデンティティ法案を採択することで、国家の基礎を築きました。これは私たちの生活のあらゆる側面に革命をもたらし、ビジョンの達成に向けて、私たちを急いで前進させています。

したがって、継続性が特に重要です。ここ数年、特に破壊的な新型コロナウイルス感染症のパンデミックの影響により、私たちの弱点や脆弱性が明かになりました。私たちは、国を進むべき正しい方向に導くために、数多くの是正措置を講じ、いくつかの政策を修正および実施し、新しい法律を制定し、ほぼすべての分野で大規模な改革に着手する必要がありました。軌道修正した以上は、目標を見失うことなく、目標に向かう道をしっかりと歩み続けることが重要です。私たちのビジョンと国の目標は、明確に設定されており、大幅な進歩がみられます。目標達成までの時間が非常に重要であるために、今走っているトラックを変更して、遅延を引き起こす訳にはいきません。私たちは今後10年以内に、私たちのこれまでのビジョンを達成しなければなりません。